

るが、もっと自分の独自性を明示すべきであろう。

細かい点を色々と指摘したが、評者自身はこの研究が将来的に発展する可能性を秘めていると考えている。ひとつの方向性はイスラーム世界内外の宮廷料理・食材との比較である。テーマの選定によってはラスール朝の特徴をより明確に浮かび上がらせることができるだろう。また、本書では食材の調達や輸送に関する議論を行うために年代記を利用しているが、その逆を行うことの可能性も追求すべきだろう。つまり、年代記に記されている種々の事件・出来事が、宮廷食材に関する情報を参照することで、より立体的に浮かび上がってくることになれば、ラスール朝に関する新たな歴史を書くことも可能だろう。いずれにしても史料の制約から難しいとは思われるが、本書で提示された知見をもとに、更なる発展を期待したい。

瑣末ではあるが、評者の専門に関わる部分で細かい点を指摘したい。史料解題において著者は『書記官提要』の著者 al-Hasan b. 'Alī al-Husaynī を、フサイン裔であることを理由としてザイド派と見做しているようである (221 頁)。これはスミスによって出版された同書の抄訳と影印に付された解説に倣ったものと思われる。しかしラスール朝に組み込まれていたハドラマウトにもフサイン裔が多数居住しており、スンナ派・シャーフイー派であった。ザイド派の人間がラスール朝に仕えていた例があるためザイド派でないとも見做せないが、サイイド・シャリーフという血統に基づいた分類と宗派性は切り離して考えるべきだと評者は考えている。

本書は、家島、栗山に続き、新たなラスール朝研究者が現れたことを示している。最初のお二人は研究成果を日本語で発表することに拘っているように見受けられるが、若手研究者としては是非日本におけるラスール朝研究の存在を英語ほかの言語でも発信していただきたい。いずれにせよ、多地域間交流の華やかさに注目が集まりがちな傾向が見られる中で、「足元を見る」ことの重要性を再確認させてくれる研究であり、今後の発展のさせ方次第では新たな地平が開ける可能性を持っている研究だということを指摘してこの書評を終えたい。

(新井 和広 慶應義塾大学商学部教授)

吉田悦章『グローバル・イスラーム金融論』ナカニシヤ出版 2017年 iv+214頁

イスラーム金融が日本経済新聞の1面を初めて飾ったのは、2006年のことであった(同年6月18日朝刊1面『『イスラーム金融』受け皿整備』)。当時は、原油価格の高騰によって生み出された膨大なオイルマネーが、イスラーム金融の成長を後押しし、中東湾岸諸国や東南アジアで空前のイスラーム金融ブームが沸き起こっていた。日本の政府や金融機関も、オイルマネーの取り込みをめざすべく、イスラーム金融への本格的な参入を検討し始めた。それに伴い、金融実務家や経済評論家による一般書も数多く出版され、日本におけるイスラーム金融の認知度と注目度は一気に高まっていったのである。

それから10年以上の歳月が経った。その間、日本国内でイスラーム金融向けの法整備が進んだり、大手金融機関が東南アジアや中東のイスラーム金融市場に進出したりするなど、日本発のイスラーム金融の実践は着実に歩を進めている。しかしながら、国内でのイスラーム金融熱は10年前と比べてすっかり冷めてしまった。イスラーム金融の一般書は、一部の例外を除いて2010年を最後にぱったりと出版されなくなり、新しもの好きの金融実務家や経済評論家の関心は、ブロックチェーンに代表されるフィンテックに移ってしまっている。また、イスラーム世界への経済的関心の多くは「ハラール」に移行しており、10年前にイスラーム金融の「専門家」として、広くマスコミに登場していた顔が、今度はハラールの「専門家」としてしたり顔で解説をしている滑稽な姿を見ることができる。

イスラーム金融を主たる研究対象としている評者は、なにもイスラーム金融熱が冷めてしまった現状を憂えているのではない。ブームが沈静化したことは、イスラーム金融の実践が「日常化」した証左であり、必ずしも実践の衰退を意味しているわけではないからである。また、実践が日常化してはじめて、イスラーム金融の意義や可能性をブームに左右されない確固たる視座から研究できるという意味においては、イスラーム金融研究に腰を据えて取り組める時機がようやく到来したとすることができるだろう。

こうした評者の現状理解をおそらく共有している（してくれている）であろう実務家兼研究者から、待望の研究書が上梓された。それが『グローバル・イスラーム金融論』である。著者の吉田悦章は、日本でイスラーム金融の認知度が高まる2000年代半ばよりも前の時期から、金融実務家としてイスラーム金融に注目し、日々の業務の傍ら東南アジアを中心に調査を行ってきた。それ以来、金融業界誌だけでなく様々な媒体（新聞から一般書、学術誌まで）にイスラーム金融の現状分析をコンスタントに公表してきており、日本におけるイスラーム金融実務の第一人者として広く知られている。イスラーム金融ブームの沈静化とともに多くの金融実務家がイスラーム金融に対する関心から離れていったのとは逆に、吉田は、2010年代に入って調査範囲を中東、アフリカ、ヨーロッパへと積極的に拡大させ、グローバル金融システムの中のイスラーム金融の役割と地域間比較という独自の枠組みの下で、より学術的な方向へ分析を発展させていった。その成果は博士論文（2015年、京都大学）に結実し、本書はそれをもとに刊行されたものである。

*

本書は、序章と結論のほか、5つの章から構成されている。以下、各章の概要について簡単に紹介する。

序章「イスラーム金融のグローバル化をどう捉えるか」では、本書の問題意識と目的が述べられている。そこでは、従来のイスラーム金融研究はイスラームの理念やイスラーム法の規定との関係性にこだわる傾向の強いことが指摘され、本書はそのような潮流とは一線を画す現場重視の実証的研究であることが述べられている。その上で、本書の目的として、第1に各国のイスラーム金融の実践の比較による類型化、第2にイスラーム金融論でしばしば語られる理念的通説の批判的検討、第3にイスラーム金融の発展における従来型金融の役割の考察を挙げている。

第1章「現代イスラーム金融取引の基底」では、グローバル化するイスラーム金融の実践の現状を概観した上で、イスラーム金融で主に用いられている金融商品のしくみを金融実務の観点を強く意識しながら説明している。

第2章「イスラーム金融の国別発展形態と環境要因」では、イスラーム金融の地域間比較の分析枠組みとして、各国の社会的環境の違いにもとづく「事業環境マトリクス」を導入し、イスラーム金融の実践の国別類型化を試みている。このマトリクスでは、各国のムスリム人口比率と金融システムの発展度が類型化の指標となり、それにもとづいて1) コア市場型（例——サウディアラビア、マレーシア、UAE など）、2) 潜在市場型（例——インドネシア、トルコ、パキスタンなど）、3) 先端金融型（例——英国、フランス、シンガポールなど）、4) 不毛地域型（例——ブラジル）の4つの類型に各国の実践が分類されている。

第3章「イスラーム金融の『周縁地域』における発展経路」では、前章で行われた国別類型化のうち、2) 潜在市場型および3) 先端金融型の事例研究がそれぞれ行われている。前者の事例であるサブサハラ・アフリカ諸国については、2000年代のイスラーム金融のグローバル化の波を受けて取り組みが始まり、かつ小口金融サービスが先行している点において、典型的な潜在市場型であり、後者の事例である英国、シンガポール、フランス、日本については、従来型金融が高度に発達させてきた金融インフラを応用することで世界のイスラーム金融のトレンドに迅速にキャッチアップすることが可能であったとの指摘がなされている。

第4章「イスラーム金融商品の発展系譜——理念と金融技術の相互作用」では、金融商品から見たイスラーム金融の沿革が描かれている。特に、イスラーム金融の草創期から多くの論者によって提唱されてきたムダーラバという金融商品が最も理念的で望ましいというコンセンサス（ムダーラバ・コンセンサス）についての批判的検討に焦点が当てられている。そこでは、デット系の取引が8割を占める世界の金融市場において、ムダーラバ・コンセンサスの実現は現実的ではなく、そのコンセンサスを実現可能なレベルに再解釈した上で多種多様な金融取引によって構成されるイスラーム金融システムのあり方を提唱している。

第5章「『地域軸×商品軸ベクトル』によるイスラーム金融市場発展の解釈法」では、第2章の事業環境マトリクスと、第4章の金融商品から見たイスラーム金融の沿革を総合することで、イスラーム金融の発展経路の特徴が論じられている。そこでは、従来型金融の持つ高度な商品組成技術をイスラーム金融が取り込んだことが、イスラーム金融の発展にとって重要なステップであったことが述べられ、イスラーム金融の発展経路における従来型金融の役割が再評価されている。

結論では、序章で挙げられた3つの目的それぞれに対する結論が各章の要点を振り返りながらまとめられている。

*

本書の特徴を端的に述べるならば、それはイスラーム金融と従来型金融の両者に対するバランスの取れた視座からの分析が行われているということに尽きる。それを理解するために、従来のイスラーム金融研究で主に見られる両金融システム(イスラーム、従来型)に対する2つの視座を振り返っておきたい。1つは、従来型金融をグローバル資本主義の種々の弊害をもたらす諸悪の根源と捉え、オルタナティブとしてイスラーム金融に注目する視座(ここでは反資本主義的視座と呼んでおく)である。そもそもイスラーム金融は資本主義の弊害の克服を大きな目的の1つとして登場してきた歴史的経緯もあるため、この視座は多くのイスラーム金融研究(とりわけイスラーム世界における研究)で共有されている。

もう1つは、イスラーム金融の独自性を重視せず、従来型金融の単なる派生に過ぎないと考える視座(ここでは親資本主義的視座と呼んでおく)である。この視座を取る論者は、イスラーム金融の実践を単なるドグマの茶番と捉えるオリエンタリストから、資本主義の多様性論の一事例としてイスラーム経済(=イスラーム型資本主義)を捉える者、あるいは純粋な金融論としてよりニュートラルにイスラーム金融も従来型金融も捉える研究者にいたるまで様々なディシプリンに広がっている。

これに対して、本書の視座は、従来型金融を悪と考える反資本主義的視座に拘泥することなく、かといって親資本主義的視座のように純粋な金融論としてニュートラルにイスラーム金融の分析を行っているわけでもない。それは、第4章で取り上げられている「ムダーラバ・コンセンサス」の扱い方からも容易に理解することができる。エクイティ系の取引によって金融システムを構成するべきだというこのコンセンサスは、デット系取引中心の現在のグローバル金融秩序に対する大きな挑戦であり、オルタナティブとしてイスラーム金融を捉える反資本主義的視座を掲げる論者にとっての重要な拠り所となっている。著者は、この「ムダーラバ・コンセンサス」の即応的な実現可能性に対して懐疑的な立場を取っているが、親資本主義的視座を取る論者のように、このコンセンサスを一刀両断に切り捨てるのではなく、どのようにこのコンセンサスを再解釈したら実現が可能であるかを根気強く探究している。

別の例として、第5章のイスラーム金融の発展史における従来型金融の再評価についても著者の絶妙なバランス感覚が垣間見られる。反資本主義的視座にもとづく研究の多くは、イスラーム金融の発展における従来型金融の役割をほとんど評価していない。これに対して、親資本主義的視座にもとづく研究では、イスラーム金融の発展は現在のグローバル金融システムの発展史の一部として周縁的に扱われるに過ぎない。著者は、これらのいずれにも与することなく、イスラーム金融の発展はイスラーム金融独自の展開力と従来型金融の発展の両方があってこそ可能であったと論じており、「イスラーム金融対従来型金融」という二項対立を超克する視座からイスラーム金融の来し方行く末を見つめている。

こうした著者独自の視座による議論の展開は、著者の長年にわたる金融実務の経験の賜物であろう。それは単に業務経験が長いということではなく、イスラーム金融や従来型金融に携わる業界関係者との非常に幅広いネットワークを構築し、常に彼らと近いところで(しかし、イスラーム金融の中心とは離れた日本で)イスラーム金融の発展を見届けてきたという著者独自の経歴によるものだと考える。また、イスラーム金融の実務とは少し離れた学術研究のフィールドとも著者が積極的に関わってきたことも、金融実務家によく見られる親資本主義的視座にもとづくお手盛りの「イスラーム金融『研究』」とは一線を画す深みのある学術研究に結実した大きな要因なのだろう。

本書独自の視座の意義を国際的なイスラーム経済研究というより大きな文脈の中で評価しようとするならば、それは日本独自のイスラーム経済研究の模範型を示したということになるだろう。イスラーム世界では数多のイスラーム経済研究が半世紀以上にわたって産出され続けており、日本のイスラーム経済研究は完全には後発組かつマイノリティである。したがって、イスラーム世界における研究と同じ視座で研究を進めることは、日本におけるイスラーム経済研究の意義を失うことを意味する。他方、欧米では、既存のディシプリン(経済学、法学など)によるイスラーム経済研究もさかんに行われているが、各ディシプリンの作法に従った頑健な研究が評価される傾向にある。

評者は、イスラーム世界とも欧米とも一線を画す日本独自のイスラーム経済研究のあり方を提唱し、それを「グローバル・イスラーム経済論」と呼んでいる[長岡 2017: 90-94]。ここでの「グローバル」とは、ウエスタンでもないフィールド・ベースでもない第三の道という意味を込めている。奇しくも本書は同じ「グ

ローバル」を冠している。惜しむらくは、本書の中でこの「グローバル」という言葉遣いについて、イスラーム金融の実践がグローバルに広がっているということ以外に、明示的な学術的説明がなされていないのだが、それを差し引いても本書は「グローバル・イスラーム経済論」の志向性を共有しうる先駆的かつまさに「グローバル」な研究成果だと評価することができるだろう。

<参考文献>

長岡慎介 2017「イスラーム経済論」私市正年・浜中新吾・横田貴之(編)『中東・イスラーム研究概説——政治学・経済学・社会学・地域研究のテーマと理論』明石書店, pp.86–95.

(長岡 慎介 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科准教授)

アブドゥルガニー・アブルアズム『ガニー・ザーヒル アラビア語辞典』(*Mu'jam al-Ghanī al-Zāhir*) ガニー出版 2013年 3589頁 (+ intro. 47頁、図・写真54頁)

現代アラビア語研究および学習ツールとして大いに活用できる、使い勝手の良い辞書が登場した。アラビア語—アラビア語辞典の『ガニー・ザーヒル辞典』(以下『ガニー』と記す。「ザーヒル」は形容詞で「輝かしい」の意味)である。モロッコ出身の辞書学の権威アブドゥルガニー・アブルアズムによる総ページ数3589頁(+ intro. 47頁、図・写真54頁)、4巻本の大辞典である。

アラビア語の辞書については、アラビア語—英語であれば、『現代アラビア語辞典』(ハンス・ヴェーア著)が定番のツールとして知られているが、学習が進むとさらにアラビア語—アラビア語辞典が必要となる。日本で普及しているものを挙げると、カイロ・アラビア語アカデミーによる編纂の『ワスイート』(中辞典)や、アラブ連盟付属機関のALECSO(アラブ教育文化学術機構)による『アサースィー』(基礎辞典)、そしてレバノン出版で、ルイス・マアルーフ著『ムンジド』(1908年初版)を底本に現代的語彙を増強した『現代ムンジド』(「救い手」の意味)であろう。『ワスイート』については、日本で言うところの『広辞苑』に相当する標準的辞書として、1960年の刊行以来、アラブ諸国内外で不動の地位を確立してきた。評者も参加した「高野辞書プロジェクト」(長澤榮治氏を中心としたアラビア語—日本語辞書の編纂プロジェクト)の底本の一部にもなっており、我が国における『ワスイート』発展型の今後の展開が期待されている。

こうした日本におけるアラビア語辞書の使用状況の中、時はネット時代となり、語彙の探し方も大きく変わってきた。語彙の意味をアラビア語の検索エンジン(グーグルアラビア語など)で調べると、「語義」を意味する「マアーニー」(<<https://www.almaany.com/ar/dict/ar-ar/>>)というサイトが必ずヒットする。そのサイトで提供されている代表的な辞書は、先の『ワスイート』、レバノンの文人ジュブラーン・マスワード編『ラード』(「先駆者」の意味)、エジプト人言語学者アフマド・ムフタル・ウマル編『ムアースィル』(現代辞書)、そして今回扱う『ガニー』の前身(ネット版では、『ガニー・ザーヒル辞典』ではなく『ガニー』のみのタイトル)である。中でも、母音記号の正確さ、語根/コロケーション/動詞と前置詞の関係に関する情報、用例の質、という外国人学習者が特に必要とする要素を満たし、使い勝手の良さと群を抜いていたのが『ガニー』であった。しかし、先の3書が、すでに出版されている紙媒体の辞書を元にしたデータであるのとは対照的に、『ガニー』については全く情報がなく、刊本の存在の有無が専門家の間でしばしば議論になっていた。そしてついに、その辞書が『ガニー・ザーヒル辞典』というタイトルで2010年に出版されたのである。

それではまず、『ガニー』の形態と基本情報について簡潔に述べよう。ハードカバーの4巻本であり、各ページ2段組で総ページは冒頭で述べたように3589頁である。1巻目は、序文 [intro. pp. 5–37] と例証の典拠リスト [intro. pp. 39–44]、略記・配列の説明 [intro. p. 45] に始まり、「アリフ(أ)～バー(ب)」をカバーし、2巻目「ター(ت)～ラー(ر)」、3巻目「ザイ(ز)～カーフ(ق)」と続き、4巻目「カーフ(ك)～ヤー(ي)」で完結する。各巻末に地図や図絵が数ページずつ付いているが、活用表や韻律表、ハムザ表記のルールなどの付録はない。収録語彙数は65880語 [intro. p. 11] で、これは『ワスイート』(見出し語〔語根〕約